

T・カンパネッラ<供述書>(一五九九年九月十日)の 考察

著者	澤井 繁男
雑誌名	關西大學文學論集
巻 号	55 2
ページ	27-54
発行年	2005-10-15
その他のタイトル	Osservazioni sulla "Dichiarazione a Castelvetero" di Tommaso Campanella nel 10, settembre, 1599
URL	http://hdl.handle.net/10112/12556

T・カンパネツラ〈供述書〉（一五九九年九月十日）の考察

澤 井 繁 男

- 一、はじめに
- 二、背景
- 三、〈供述書〉
- 四、考察
- 五、おわりに

一、はじめに

本稿は、イタリア・ルネサンスの掉尾を飾る自然魔術師トンマーゾ・カンパネツラ（一五六八―一六三九年）の企てた、いわゆる「カラブリアの陰謀」について、発覚捕縛後の最初の〈供述書〉を読み解き、それがカンパネツラの数ある〈供述・弁明書〉の中でどのような意義を持つかを考察するものである。

カンパネツラは、十四年ぶりに故郷である南イタリア・カラブリア地方の山村ステイーロに帰された（一五九八年八月末、三十歳）。

彼は、反アリストテレス主義の異端的思想の持ち主として、ナポリの異端審問所に嫌疑をかけられ投出獄の後、北

イタリアのパドヴァまで逃亡し、ヴェネツィアで異端審問官に逮捕された(九四年十一月)。ローマで獄中生活(九四年一月―九五年五月)を送った後、ローマやナポリで主に過ごすが、不運の女神に取り憑かれたまま、送還されるようなかたちで故郷に戻されることになる。

ローマの牢を出獄する際、異端誓絶を行なっているのだが、〈供述書〉を読むかぎり、それが上辺だけのものであることが看取される。

二、背景

カンパネッラが生まれたのは一五六八年であるので、すでに一四九四年からはじまっていたイタリア戦争は、一五五九年四月二―三日に北フランスの(現在のル・カトー)で結ばれた「カトー・カンブレジの和約」で終結しており、半島は政治的には平穩を保っていた。かつてアンジュー家が統治していた(二二八二―一四四二年)ナポリへの、フランス王の執着と野心が惹き起こしたイタリア戦争の主因は、半島の求心性を欠いた政治状況にあった。

ローマ教皇庁は半島が統一されることで、聖権が俗権の支配下に入ることを恐れ、事あるごとにアルプス以北の各国や半島内の各都市国家を挑発し、カトリックの原義である「普遍性」を聖的に墨守しようとした。一方ミラノやヴェネツィアやフィレンツェ等の有力都市国家はそれぞれ自主独立を主張して譲らず、つねに各々抗争が絶えず分裂状態がつづいた。その意味でコムーネ(共同体)と呼ばれていた都市が都市国家へと成長したことは、イタリアの経済的繁栄をもたらした利点は措いて、政治的乱世を招いたことになる。というのも、アルプス以北のドイツ、フランス、それにイベリア半島のスペインなどに、虎視眈々とイタリアを我が掌中にとねらう動機を与えることになったからである。ルネサンス時代と呼ばれる、十四世紀中葉から十七世紀初頭までのおよそ二五〇年間余りは、数十年間の安定

期を除いて、おおむね政治的状況は惨憺たるものであった。

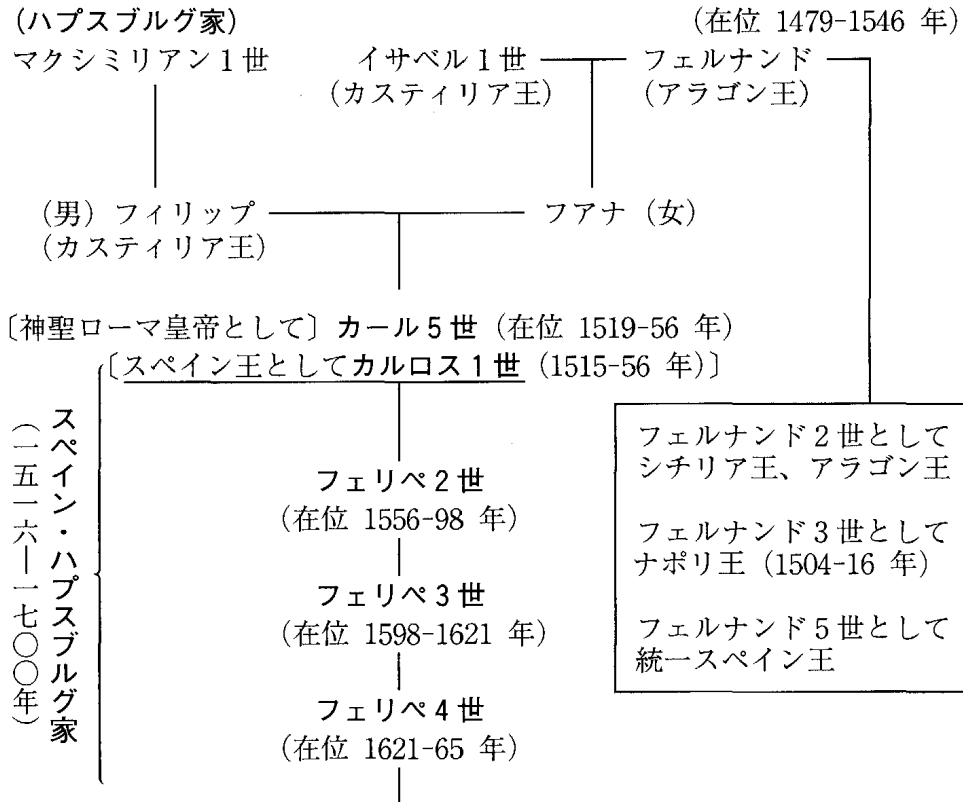
カンパネッタが生まれる前の南イタリア（ナポリ王国）は、フランス・アンジュー家がアラゴン王家に駆逐され、イベリア半島東部のアラゴン王家の支配下で栄えていた。

アラゴン王家本家の支配（一四四二―一五八〇年）のあと、傍系のアラゴン王家が治めた（一四五八―一五〇三年）間にも、フランス（シャルル八世、在位一四七〇―一四九八年）の侵攻があつて、一時僞王がナポリ王（一四九五年五月）に登位するが、すぐにアラゴン軍に撃退されている。

半島南部の混乱はつづくが、スペイン系の支配はつづき、アラゴン王家のフェルナンド二世（在位一四七九―一五二六年）とイベリア半島西部のカステイリア王国のイサベル一世の一四六九年の結婚によって、スペイン（イスパニア）としてポルトガル王国を除いて半島が統一され、スペイン王国が誕生する。一四九二年にはイスラム勢力の最後の拠点グラナダが陥落し、夫妻は名実ともに「カトリック両王」の名をほしいままにする。（イベリア半島に出来た、アラゴン、カステイリア、ポルトガルなどの国々は、イスラム勢力を追放するための国土回復運動^{レコンキスタ}の経過で国家として形成されていった。グラナダ陥落でキリスト教徒の勝利に終わったわけである）。

フェルナンド二世は、シチリア王、アラゴン王、それにフェルナンド三世としてナポリ王（一五〇四―一六〇六年）を兼任し、統一スペイン王の名称ではフェルナンド五世を用いた。

系図1で明らかのようにナポリ王国は、スペイン・ハプスブルグ家の属国となる。カルロス一世は、副王（総督）〔代官〕を派遣してナポリ王国を統治する政策をとる。スペインはフェリペ二世のとき最盛期を迎え、いわゆる「太陽の沈むことのない」植民帝国と呼ばれる。カンパネッタが生まれた一五六八年はフェリペ二世の治世であるが、彼が政治的に関わり合いを持つのはフェリペ三世の時代であつて、まだ先のことである。



〔系図1〕

前述のカトー・カンブレジの和約は、フェリペ二世、エリザベス女王（イギリス）、アンリ二世（フランス）の三者間で結ばれたものである。イタリア戦争は、休戦をはさみながらも六十五年間もつづいたが、結局フランス勢力の後退をもたらし、スペイン・ハプスブルグ家（つまり、スペインとドイツ）の勢いが高まったことになる。特にスペインの進出には目を見張るものがあり、すでに発見されていた新大陸を着実に植民地化していった。

またローマ教皇庁内での反動勢力による対抗宗教改革も触手をのばし、ジェスイット教団の公認（一五四〇年）、宗裁判所の設立（一五四二年）、禁書目録の作成（一五四三年）とつづいた。一五四五年から六三年までトリエント公会議が開かれ、新教に対抗すべくカトリックの基本的教義が確認された。

この間のスペイン王はカルロス一世とフェリペ二世であるが、属国となったナポリ王国は、カルロス一世の代官として、大総督とまで呼ばれたペドロ・デ・トレドが二十年間（一五三三—一五五三年）ナポリ王国を直接治めることになる。

トレドはナポリ王国土着の豪族（封建領主）たち、いわゆる旧勢力の力の削除（具体的には封土の削減）を実行し、スペイン王への忠誠を誓わせる方向に持っていく一方で、アルテ（組合）への援助を惜しまずに、新しい中産階級を育成して、イタリア南部の頑迷で因襲的な社会構造を徐々に内部から砕いていこうとした。

〈旧〉の牙を抜き、〈新〉を育て上げていく両刀遣いの牙えを見せるのと同時に、当局による一般民衆への苛政、王宮の慣例行事への参列が義務づけられた。不満な豪族たちは違反行為を断行し、民衆は国王や総督へ、絶えず提訴、請願、陳情を行なった。

要するに、これらは、スペイン本位の政治的覇権が、イタリア南部に着々と確立されていく過程の段階に起こる、予測可能な事態として位置づけられる。苛政とは当局の民衆への傲慢的施政にほかならず、重税がその最たるものであった。重税負担だけをとっても、政治・経済・社会に及ぼす影響は目に見えて明らかで、さらに〈新旧〉の豪族勢力を争わせるよう仕組む施政は狡猾そのものである。〈新〉勢力の中産階級となったアルテの人たちが、〈旧〉陣営の無能な豪族たちと闘ったことじたいは、マキャヴェッリの言う「正義の兆」として評価されもしようが、所詮スペイン王の掌中で踊らされているだけにすぎない。

スペインとしては、〈新旧〉の豪族たちの均り合いを保ちつつ立憲政治を無難に行使する傍らで、故意に圧政を敷いて、策略的政策の可能性をさぐる必要性があったと思われる。

カラブリア地方に限れば、ナポリ王フェルナンド三世治下の一五二二年にすでに地元の民衆を圧する豪族に対する決起が生じている。サンタ・セヴェリーナとマルティラーノの住民の間での暴力沙汰で、強奪・流血・投獄をもたらした。四年間もつづいた。死者もとうぜん出たし、一家全員が土地を失ない、いっそう生活苦にあえぐはめにも陥った。

ステイロに対しては、カルロス一世はその戦略的位置やノルマン軍に対して示した勇武に鑑みて、関心が強かったようで、(伯(コメス)の爵位を与えている。そして次の二つの理由で、住民の反抗による被害は覚悟の上で、ナポリ王国の有するステイロの土地と諸々の要塞の売却に乗り出した。

その理由の一つは、オスマン・トルコの侵略からイタリアを守るため、二つめは、キリスト教という宗教のイスラム教からの保護である。一五四〇年五月十一日に教皇パウルス三世と約したこの二項目はスペイン王室憲章にも刻まれている。

総督トレドはこれを受けて、一五四〇年七月三十一日、ステイロ伯に司法権という特権を授ける代わりとして、一二五四スクーデイ(一スクーデイは五リラ銀貨に相当する。当時のステイロでは一戸あたり二スクーデイの分配率にしかすぎなかった)で、強欲な一族であるコンクブレット家にステイロの町と城塞を売った。コンクブレット家は、アレーナ侯であつて、当主ジョヴァン・フランチェスコに対して以前より不満を持っていたステイロのアルテは即座に異議申し立てをした。

それに対処すべくトレドは、ノチェラ公に売却した、いや、売却を装った。ステイロ側は、断固として町を買い戻すための優先権を主張した。そこでカルロス一世は一五四五年二月二十七日、ナポリ近郊の保養地ポッツォーリから、町を返却するべく王室証書に署名した。しかし裏工作も怠らなかつた。アルテや民衆に、豪族たちから当局が窃取する収益をほとんどすべて町の実質的資本とすると約しながらも、それが最終的にノチェラ公からアレーナ侯の手にわたるように画策したのである。また、王室派遣の守備隊長が城塞に住むのを望んだ際、実際住まうことができるように、要塞をステイロ側が再び取得できるのを条件に、守備隊長の要塞の所有を認めさせた。

派遣されて定住した隊長はステイロの住民となり、特権である司法権も行使でき、裁判を行なうことができるわ

けで、特権の意義は消えることになる。それゆえムーネの人たちや周辺の集落の人々は、隊長が法廷を開きたくないと言え、裁判を受けられないという事態にもなる。こうした政略は法廷が一般民衆の道具とされぬための、国王が案出した弥縫策のひとつであった。スペイン側の策謀が透けて見え、あくまで地元の豪族を手懐け、いかに民衆(特にアルテ)を懐柔しようとしたかがわかる。国王に逆らう者は威嚇され、千ドウカーティ〔金貨〕の罰金を支払わされた。

司法権という特権を一応得たステイロだが、カルロス一世の死後に登位したフェリペ二世〔在位一五六一―一五八八年〕が一五五七年にステイロ(伯)の地位と担保の証書を示していったん売却した国有地を取り戻してしまった(Cunsolo 1987: 82-83)。

このようにいい加減なスペイン当局の施政にステイロの民衆たちが蜂起しないわけがなく、トレドが町に、一五五四スクーディを支払ったその翌年の四一年九月十三日にはノチェラ伯とアレーナ侯を町から追放する決起が行われている。その反乱の首謀者の一人に、カンパネッラの父であるジェロニモ・カンパネッラがいた。彼は投獄の憂き目に遭い、家族は困窮する。カルロス一世の四五五年の工作はこうした起因があつたことなのである。

この父の血を引いて、一五六八年九月五日日曜日、カンパネッラは生まれた。幼名をジョヴァン・ドメニコ・カンパネッラと言った。九月十二日に、ドン・テレンツィーノ・ロマーノ神父により聖ピアージョ協会で洗礼を施された。

生家は、市壁の外の(新開地)にあつた。ステイロ全景絵図では、コンソリーノ山の傾斜面に建ち並んだ地域が市壁内の町の中心にあたり、カンパネッラの生家は、ビザンチン様式で著名な教会であるカッターリカともども町はずれに位置していた。父ジェロニモの職業は靴直し業で、妻カタリネッラ・マルテッロとの間に九人の子を儲けている。母親は子育てに手一杯の状態、父は投獄の辛酸を嘗めて生活は楽ではなかった。それにジェロニモは文字が読

めなかつたと伝えられている。

長男であるジョバン・ドメニコ・カンパネツラは、幼少年期からすでに才覚を顕わし、神童の誉れ高い子供だった。文盲の父にしてみれば、息子たちのうちのひとりだけでも、せめて貧困や悲惨な生活から脱して、陽のあたる道を歩んでほしかったにちがいない。

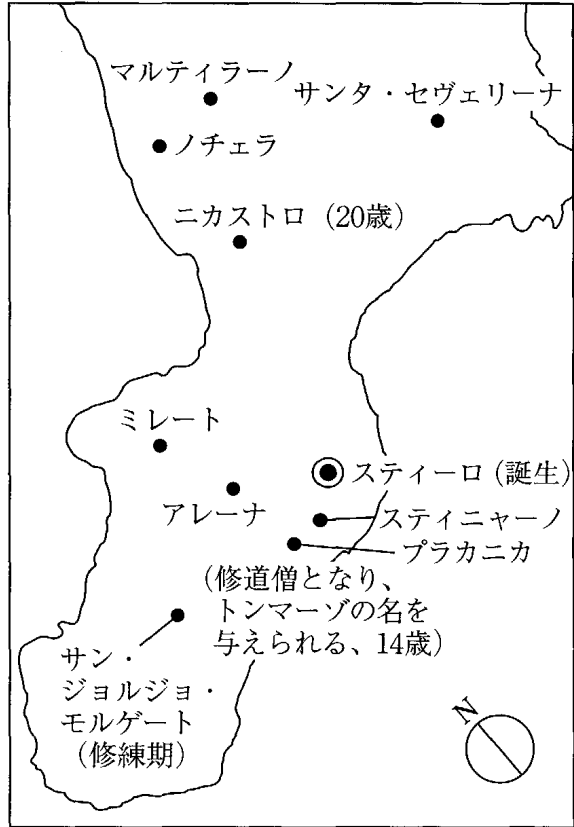
カンパネツラの血には、父の反抗の精神が遺伝子のごとく組み込まれていた。それをみずからも自覚していたと考えるのは、やがて同じく陰謀の推進者となる彼に対して、あまりにも勝手にロマン的な見方であろうか。

貧困にあえぐが才知あふれるカンパネツラは、貧しいがゆえに受けられない学校の授業を門の外で立ち聞きし、同年齢の子供たちのように生活は豊かでないにせよ、知力の点では劣らぬと、教師に繰り返し訴えた、というエピソードも残っている。

文法の教師であるアガツイオ・ソレーアという人の厚情で、授業の出席が許可されたことは、確実な記録として認められる。カンパネツラの記憶力は群を抜いて優れており、引き継いで教えた教師たちはみな感銘した。論理学の教師は叔父のジュリオで、彼は社会改革も志しており、カンパネツラにその方面での影響を与えたと推察される。

当時のカラブリアは山賊などがいまだに跋扈していたが、それに加えて疫病（とりわけペスト）が不定期ながらも席卷した。カンパネツラの少年期にもシチリアに端を発したペストがカラブリアも襲う恐れがあったので、父ジェロニモは一家をあげてステイロから数キロ南に下がったステイニャーノに転居した。そして近郊のプラカニカの修道院（ドメニコ会）で、カンパネツラは、トンマーゾの名を得て、修道僧となった。一五八二年、十四歳のときである。白色の修道衣は、この利発な少年にとってもよく似合った。

トンマーゾ・カンパネツラとなった彼は修行期をサン・ジョルジョ・モルゲートのアンヌンツィアータ修道院で過



カラブリア地方
(生誕から20歳まで、1568-88年)

〔地図1〕

ごした。この地でカンパネッラは修道僧の道の第一歩を踏み出したのである。

地元の豪族であり、善政を敷いて封土を治めていたジャーコモ・ミラノ二世に敬意を表すため、彼は自作の詩（祈りの詩）を御前で朗詠した。詩人の詩才はミラノ二世の夫人イザベッラ・デル・トゥーフオの心を打ち、好感を抱かれる。この偶然の出会いによって、デル・トゥーフオ家との親交がはじまるが、わけても、カラブリア地方で最も威信のあるミレートよしみの司教職を務めることになるマルカントニオ

と誼よしみを結ぶことになった。

デル・トゥーフオ家はナポリの古くからの家柄で、ナポリ独特の文化的生活や貴族階級の生活を営む典型的名門であり、後年（一五八九―九二年）、カンパネッラは一家に招かれ、歓待されている。

二十歳（一五八六年）になったカンパネッラは、ニカストロのアンヌンツィアータ修道院に移った。そこで、じきカラブリア地方修道会管区長の顕職に就くことになるアントニオ・デ・フィオレンツァ神父の教授を受ける。ニカストロでは、ピエトロ家の三兄弟―ポンツイオ、フェツランテ、ディオニジオ、それに、カンパネッラが主謀者となった一五九九年の陰謀の際、みずからの代理とも呼ぶことになるバッテイスタ・コルテーゼ・デイ・ピッツォーニとも親交を深めた（Formichetti 1999: 7-9）。

以上のことから理解しておきたいことは、ステイロの住民に自主独立の精神が高く、一つのコムーネとして、前身であるギリシアの植民市として歴史を刻んできたこと。スペインの圧政がつづいており、山賊も出没しているにも拘らず司法権が安定していなかったこと。また時期的にオスマン・トルコ勢力がイオニア海沿岸を荒らしまわっている、内陸部も略奪の標的としてねらわれていたことである。

こうした故郷の情勢の中に、ドミニコ会の中すでに出世の道も失い、教会への反抗心を抱くに至ったカンパネツラが戻ってくることになる。

目にしたのは苛政に苦しむステイロの人たちであり、ステイロを二分して争っている二つの一族の争いであり、また一方では自分の反アリストテレス主義の思想（汎感覺思想）を認めずに聖職者としての未来を奪った教会への恨みがあったであろう。

外的現実の悲惨さと内なる敵愾心に対してカンパネツラは、ひとつの使命感を覚えるようになる。スペイン人を追放し、私有財産制をなくし、教会の位階制度を取りやめ民主的な自治を確立することである。その形態として彼が意図したのは、共産主義的で神権政治的な共和国の樹立で、みずからが首長となり立法者となることであった（Elipe, 1998: 99）。

おそらくカンパネツラだけにしか理解できかねると思われるこの想念を一般の民衆や知識人たちに説くには、彼自身がある種の人物になり切る必要があったであろう。それは、ステイロの生家にはめられているプレートトに的確に表現されている。

ここに、一五六九年九月五日日曜日の午後、新時代の英雄的預言者、

トンマーズ・カンパネッタ、生まれる。

ステイーロは彼の生誕この方四〇〇年、カンパネッタの故郷である。



ステイーロ（〈新開地〉と広大な谷あい）

故郷の人たちから〈預言者〉と讃えられるカンパネッタが誕生する。彼は九八年八月末にナポリから十四年ぶりに生地ステイーロに戻り、サンタ・マリア・デイ・ジェズという小体な修道院に入る。

ここで英気を養うと言えば聞こえはよいが、地元の不平不満分子たちがカンパネッタに指導者のイメージをひそかに抱いてしまい、他に換えがたい傭兵隊長の姿にまでふくらんでいたことが、ある意味でカンパネッタにとっては不運であったであろう (Firpo 1998: 100)。

というのも、カンパネッタの考える理想は高邁であり、地元の人たちの争いや願いをかなえるには、きわめて夢想的でありすぎたからである。したがって彼は曲解されつつも、地元の人々の熱望の中にもみずからの理念を注ぎ込むことになっていく。九九年二月から四月にかけて、修道院附属の教会で繰り返し預言を説く。終末思想の名文集を集めていた形跡もある。公に、世界的大変革の兆について熱弁をふるった。

六月にはいつのまにか陰謀団との関わりを持つに至っていた。

三、〈供述書 Dichiarazione Di Castervetere〉

カステルヴェテレ Castervetere とは現在のカウロニア Caulonia の古名である。カンパネッラは生涯にわたって幾度もこうした裁判に引つ張り出され、そのたび〈供述〉や〈弁明〉を繰り返している。これ以前にもすでに経験済みで、場慣れしていることを念頭においておく必要がある (Firpo 1998: 44-95)。

〈供述書〉で述べられる内容は、陰謀の全容を語っていることになっていて、多くのカンパネッラ研究書がこの〈供述書〉を基に陰謀の解明を行なっている。本稿では訳出も試みつつ、陰謀の息吹のようなものをも伝えられたらと考えている。

陰謀は九九年の六月から九月にかけて、わずか三箇月にも満たないで発覚—失敗してしまうのだが、短期間であるがゆえに人間関係やトルコとの関係も含めて中身は濃厚である。

これから供述の順に従って〈供述書〉を読み解いていくが、逮捕されてからたった四日後の供述である。カンパネッラの口調は熱を帯び、短期間の出来事にひとつひとつ言及していく。文言が機関銃の乱射のように発せられている (Firpo 1998: 102-113)。

1 預言(者)

〈供述〉の冒頭から、「コリントの信徒への手紙Ⅰ(十四章の三十一)」の文言「一人一人がみな預言できる Poetis omnes prophetare」を引用してみずからの素性を明かしている。

私こと、修道士トマーゼ・カンパネツラは聖ドミニコ修道会に属し、カラブリアのネート川「スペイン・アラゴン家はカラブリアをこの川で二つに分けて統治」の南側にあるステイーロの地の出身で、さまざまな学問を学びましたが、とりわけ預言に専心してきました。つまり、聖パウロにたいへん推奨されています（コリント書）で、そこに「一人一人がみな預言できる」とあります。

それゆえにナポリ王国に存在していた歴史を繙いてみて考察しますと、常に、短期間ではありますが、いろいろな一族の下で初期・中期・末期をともなった革命 *rivoluzione* がありました。私には早晩、変革 *mutazione* が起るのが当然だとふと思ひ浮かんだのでした。その上で私は人々に話してみますと、彼らは王国の諸閣僚に対して自分の生きている時に言えるかもしれない多くの不満をこぼしました。その後、さまざまな占星術者（特にナポリ人ジュリオ・コルテーゼ、偉大な数学者コラントニオ・ステイオーラ、ジョヴァン・パウロ・ヴェルナローネ、みな三年前ナポリにいたこと）と議論をしましたところ、私は彼らから、国家を変革 *mutazione* すべき時であることを理解したのでした。

さらにチプリアーノ・レオニツイオの作成した天体位置表によれば、この二年の間で大きな食がはじまり、一六〇五年までつづくと出ています。大いなる新しい出来事を示しているわけです。

とつづく。この預言のおかげで、主なる神が森羅万象に未来の徴しるしを刻む。それに従って未来の兆候がわかるのである。カンパネツラは自分がその預言に長けているし、優れた預言者の名を列挙することで、ナポリ王国で革命が生ずる必然性を裏づけようとする。

引用した部分でカンパネツラの基本用語は二つに分かれている。*rivoluzione* と *mutazione* である。訳出したら原稿用紙で二十枚に満たない（供述書）の中に、後者の *mutazione* の方が多く使われている。

「ムタツイオーネ」は、「mutare ムターレ（変える、交換する）」の名詞形である。生物用語で「突然変異」の意味がある。カンパネツラが、ナポリ王国を変革しようとしていることがわかる。「レヴォルツイオーネ」は文字どおり「革命」で、世の中をひっくり返すこと、転覆を意味している。

あえて「革命」を用いずに、それよりも意味的に弱いと思われる「ムタツイオーネ変革」を用いているのには、彼の政治的意図が「国家の革命」でなく「政治変革」にとどまっていることが理解できる。この範囲内ではスペインの属国支配からの脱却でないのだが、カンパネツラの思念は多少とも、現実離れしたところに基を置いている。

プロフェータ預言者たちの名前を列挙することで、現実的な「革命」というよりもむしろ、預言という宇宙や神との関わり合いの中に「変革」の発想の源を求めている。

次に十五世紀のフェッラーラの占星術師アントニオ・アルクアートを手ガリア人と誤解して引き合いに出している。アルクアートの著作『神の予見』がハンガリア王へ一四八〇年に献呈されたための勘ちがいである。『神の予見』に書かれている、オスマン・トルコとキリスト教徒間で勃発するであろう問題が実際に予見どおりに起こったことに、カンパネツラは強い影響を受けている。事実ハンガリーは、一五二六年モハーチの戦いでオスマン・トルコ軍に敗れて領土を失った。また同著には、イタリア諸国家の革命と教会の改新が一五三八年に一挙に起こるであろうと記されてあった。

イタリア諸国家の革命の例を一つ取り上げるとすれば、フィレンツェ共和国をメディチ家のコジモが継いだのが一五三七年、教会ではイエズス会が一五三四年に設立されていて、両者ともに一五三八年以前に生じている。『神の予見』の出版は一四八〇年ではなくてアルクアートの没後一五三六年である。すでに〈出来事が起こった後〉であったが、カンパネツラはアルクアートの予言力をきわめて高く評価して、そこに普遍的因果律を看取っている。

約六十年後の一五九九年にも何かが起こってしかるべきだとカンパネッラは考える。「今年、ローマとロンバルディアに大洪水が、シチリア島とカラブリアに大地震があると、〈福音書〉に則って私はステイローで予言しました。これは人間の事どもの変革を指しています」。

したがって私は、愚見を述べてほしいと強く促されて、諸々の変革ムクツイオーニが起こるだろうと予言したり話したりしたのです。とりわけ九九年の今年の聖週「復活祭の前の週」に、私の故郷ステイローで、途轍もない洪水が起こるでしょう……。

さらにオトラントのアッバーラ・イドロンティーノの預言からシチリア島やトスカナやカラブリアで変革があると述べている。以上のことは、他の占星術師や賢者も同じことを言っているので、真実の可能性が高いとカンパネッラは述べる。

事程左様に、カンパネッラの頭の中は、天変地異一色となっている。変革は自然災害が原動力となると言っているのに等しいわけで、大災害のあとにどのような社会を築き上げるつもりなのかはここでは明確に打ち出されていない。冒頭陳述で自分を預言者と見立てて人為的要素を極力避けようとしているが、これはおそらく故意ではなく、カンパネッラ自身、話しながら自己確認を行なっていたのであろう。

教会は残存させたまま政体を変えたいがための〈変革〉なのであって、大洪水や大地震で暗示されているは、王国を自然災害で一掃したいという願望かもしれない。

カンパネッラの思想の特徴のひとつに、神の書を、聖書と自然との二つに分けて考える点が挙げられる。彼にとつての神とは自然に宿っているものであり、自然災害は神の御意でもあるが、自然そのものの意思でもあり、両者を操

作できる人物こそ自然魔術師であり、カンパネッタ自身なのである。

2 ステイーロの情勢

陰謀には仲間が必要である。

十四年ぶりに帰郷したステイーロは二つの一族の確執の最中であつた。彼の〈供述〉は次に、ステイーロの勢力争いに入っていく。

さて、ステイーロに戻つてくると、カルネレヴァーリ家とコンテスタービレ家の間が敵対関係にあり、私は判事〔アンニバーレ・〕ダヴィドから、和解に一役買つてほしいと雇われました。そしてこれがきっかけでコンテスタービレ家との結びつきが強くなりました。ある日、ジュリオ・コンテスタービレの義兄弟であるジローラモ・デ・フランチェスコがやつてきて、聖母の浄めの日〔九九年二月二日〕に私が〔教会で〕預言したように変革が起きるのはほんとうかどうか尋ねてきました。私は、みながそう思っていると応えました。すると彼は変革以外に希望はないと返答したのでした。

コンテスタービレ家は武闘派で山賊まがいの行為をしており、三人兄弟の長男マルカントニオ・コンテスタービレはステイーロを追放されており（次男がジュリオ。三男がジャンバッティスタ）、ジュリオも信用できない男だとカンパネッタは述べて、ジローラモに〈変革〉のことをジュリオに言わないように頼んでいる。

両家との折衝が進むうちに、とうとう長男マルカントニオがやつてきてカルネレヴァーリ家との和解に応じた。す

ると次男ジュリオがカンパネツラの滞留している修道院にやってくる。「そこには確かに、マルカントニオとスクイラーチエの悪玉トマーゼ・カッチアもいました。彼らは何度も何度も、スペイン王国の役人の悪口、特に守備隊長以下全員のスペイン人をのしつたのです」。

兄弟の父は獄中であつて、カルネレヴァーリア家が政治を握っていることへの不満を彼らは吐き散らしたが、カンパネツラは神が与えて下さつたものだからと言い、聞き役に徹した。

3 陰謀

カンパネツラはステイーロで劣勢力であり、かつ無頼漢であるコンテスタービリア家兄弟の鬱憤を聞きつづけることになるが、ある日僧坊に飾つてあるフェリペ三世の肖像画（フェリペ二世は数箇月前の一五九八年九月十三日に死去し、若干二十一歳のフェリペ三世が王位に就いていた）を彼らが見て、

「フェリペ二世が亡くなつたのは残念なことだ。トルコもフランスもこの王国を乗っ取りには来ないさ！」

「変わったことを考えるんだな！」

私が言いました。

部屋の中の連中がフェリペ三世が青二才で統治能力がないと批判して、肖像画を踏みつけて傷つけようとする。カンパネツラはすこしよごれた肖像画を溺状ののりで元の場所にかけてべつのもかけた。と、ジュリオが二つとも取つて、トランシルヴァニア侯〔現ルーマニア中部の地方。ジギスモンド・バトリイ〔在位一五八一—一六三三〕〕とトルコ王（ムハメット三世〔在位一五六六—一六〇三年〕）の

肖像画も取りはずして家に持って行ってしまふ。みなカンパネッラの僧坊にもととかけてあつたものであつた。

数日後、私が変革が起こると言うのと、ジュリオは、「主がそれをお望みである、なぜなら俺たちの勢力は大きいから!」「どれくらいだ?」と問うと、兄のマルカントニオを見遣つて、「山賊に仲間や友達がたくさんいるし、他の人間だつて、それに親戚もだ」「それだけでは何もできない。大部隊に対抗できない」と私が言い、少し間を置いてから「たくさん味方がいるのはいいことだ。国王がもし戦闘を開始したら、誰を後楯にして勝つつもりか」「トルコに何度か行つてくる。トルコ軍なら援軍をよこすだろう」とジュリオ。

カンパネッラはトルコのスルタンの肖像画を壁にかけていた。この理由は判然としない。彼の胸中に当初からトルコに対して何らかの期待感があつたのか、あるいは、ヨーロッパを支配するスペイン・ハプスブルク家に脅威を与へうる存在として一目置いていたのか。オスマン支配下のトランシルヴァニア侯の肖像画もどうして飾られていたのか。イタリアにとつてどういう意味を当時のオスマン・トルコは持っていたかである。コンスタンチノーブルにベラ地区というのがあつて、そこで、かのニッコロ・マキャヴェリの姉の息子が商売をしており、マキャヴェリが手紙を書き送っている事実はある。一五二〇年代の話で、商業上の結びつきはあつたようだ。それから八十年後の、政治面での畏怖かあるいは憧憬か。

さて、引用文のジュリオの考えがあくまで希望的観測にすぎないことも彼は理解していた。カンパネッラはステイロは山村で軍事力は不要だと言ひ、スクイラーチェの君主の判断を引いて、トルコ軍が海から遠い、この山間の、道が狭い所を軍事支援のため通つてやつてくることはありえないと主張する。

とにかく人数を集めることが先決だと言うと、コンテスタービリア家の縁者をみなかき集めるといふ応えが返ってくる。

カンパネツラ自身はステイローで仲間ですでに声をかけており、修道士ディオニジオ・ポンツイオやジョヴァン・バッティスタ・デ・ピッツォーネなどが賛成してくれていた。七月にはカステルヴェテレに二日間、ステイニャーノの両親の下で数日すごし、八月初めダヴォリ、そしてサンタ・カテリーナに向き、ステイローに戻ってきている。

一方、コンテスタービリア家の敵であるカルネレヴァーリア家の動きも見逃せない。彼らも武装していてコンテスタービリア家に恐怖心をはや抱いていないという情報も入ってくる。

また、貴族で無頼の徒であるマウリツィオ・デ・リナルデイスからは、ステイローの守備隊長であるプロテイーノに裏工作をしたかどうか問われ、賄賂の額まで提示される。マウリツィオはカンパネツラがステイローの仲間たちに語った、〈変革〉が起きることは本当かと訊く。カンパネツラの回答は正しい理法でそう予見したのだ、と応えるばかりだった。マウリツィオは神だのみだな、と嘆息する。

カルネレヴァーリア家でも、戦いがあるのかと質ただされるが、「戦いははじまれば神が救ってくれます」とカンパネツラは応ずるだけであった。

神から戦いを賜ったのです。国を変えるため、王国がいつそう善くなることをするために。危難はわかっています。すが、もつとよい政府をつくるために。王様がフェリペでもべつの王であっても、キリスト教の他の君主であつても、友誼を保つてくれる人はきまつて偉大な人物になります……。正しい動機に従う人は耐えることを気にかけるべきではありません。最後はダヴィデのように顕彰されます。そして悪は滅びるのです。

こういう調子のカンパネッラはマウリツイオから、半ば呆れられ修道院の中にこもっているよう懇願される。

4 迷走

〈変革〉を起こそうとしているその現実に流血はとうぜん伴うだろうし、敵となる相手には懐柔も必要であろうが、そうした戦略には目を向けずにいるカンパネッラは、仲間にはほぼ愛想をつかされた感がある。修道院にもいたくない彼は、数日後アレーナ侯シピオーネ・コンクブレットに招かれて、アレーナに十五日間滞在。次にピクツォーニに行きたいと頼み込む。そこで大歓迎を受けるはずだと考えてのことだが、いざ行く段になると、いつも行動をともにしていてくれた文盲の末弟ジョヴァン・ピエトロ・カンパネッラを殺すために敵が二人を待ち伏せしていると耳にし、恐怖におののく始末である。

ピクツォーニでは修道士ジョヴァン・バッティスタがアストロラーベ〔天体観測器〕の造り方の本を持っていて、友人たちに、近い将来待ち望んでいる〈変革〉が起これると言う。一人がもし戦いをしなくてはならないならば、味方は大勢いると誇ると、カンパネッラは次のように言うのだった。

たくさんいれば申し分ないでしょう。いつでも役に立つものですから。諸君主たちも国王も多く味方を持っていてる人たちを心に留めるものです。そしていつも味方はみなさんのために働くでしょう。

これを聞いてみなのは〈変革〉へと動いた。道でこの話を耳にした農民たちからは圧政への不満の声飛びかい、カンパネッラは決意を新たにす。「神は賢明で善良な人々に万事を託しており、それがうまくいけば善となるし、

首尾よくいかずば悪となるでしょう」ともマウリツィオに話していることから、圧政そのものへの視線はあり、救済の道を探ろうとしてはいても、〈変革〉のための軍事的蜂起にはほど遠いところに視点を据えている。

肝心なときにステイロを空けてしまうのも、そうした面での認識の甘さゆえであろう。

5 発覚・逮捕

アレーナ滞在中に、ステイロにいるジュリオ・コンテスタービレから、マウリツィオがトルコのガレー船隊の艦長のところに向かったという手紙を受けとる。オスマン朝研究家の新谷英治によると、オスマン朝は海賊に提督や艦長の地位を与えて、北アフリカや南イタリア方面の支配権を掌握していたという。海の荒くれ者たちだからトルコ人ばかりではなかった（新谷2005: personal communication）。この場合も称号は艦長だが、実質は海賊であった。

カンパネッラはマウリツィオがトルコ艦隊長と船上でトルコ艦隊に支援を求める契約を交わしたと聞いて驚愕する。

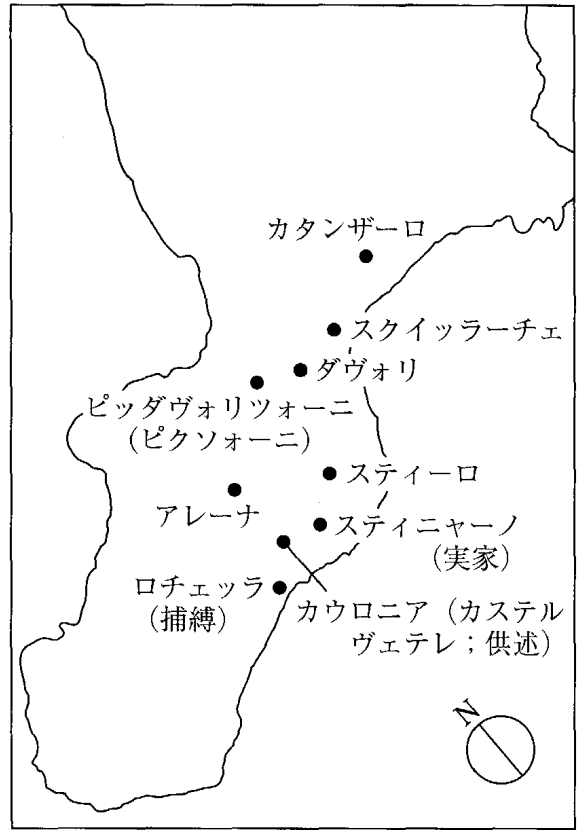
なぜならトルコ艦隊は略奪を行ない、カタンザーロやその附近一帯を襲撃したがっていたからです。とんでもないことをしてくれたものだと言いました。やつらは信頼できないし、敵です。信用できません。この交渉はマウリツィオの手でうまくいったと思っていました。彼はトルコ軍の条件をのんできたと応えました。トルコ艦隊はカラブリアに支配権を持つのでなく、沖合いで、蜂起を妨害する者に恐怖感を与えるために錨を下ろしているだけだ、トルコは王国内での交易を欲しているだけで、他に何も望んでいない、と彼は言いました。というのも彼が、艦長アマラットがトルコ語で書かれた書類を私に示したからです。読めるわけがありません。

「用心しろよ、マウリツイオ、トルコ人はこんな書き置きなんか守らないぞ」

と言って過去の悪例をいくつか挙げていく。カンパネッラはマウリツイオの行動に悲憤を覚え、友情もこれまでだと臍を固める。

カンパネッラはマウリツイオと袂を分かつてサンタ・カテリーナに気晴らしに三日間出かけていく。そしてステイローに戻ってくると、旧友である修道士ディオニジオ・ポンツイオがタヴェルナの修道僧をつまらぬ理由でたたきめしたと言った。しかしディオニジオは、聖職にある者が暴力をふるうと聖衣と読師を剥奪されて、三年間は牢にながれるのを知っていたので、マウリツイオと連絡を取って、カンパネッラの預言に則ってカタンザーロで反乱の内容を説きはじめた。これで陰謀がもれてしまう（八月末）。この陰謀には教皇クレメンス八世（在位一五九二—一六〇五年）や枢機卿サン・ジョルジ、ミレート司教、ニカストロの司教、トゥーフォ家の人たちが支援してくれていると、ディオニジオは自分とカンパネッラの考えられる限りの顕職者たちを挙げていった。

私は真実において誓います。こうした事柄を私は決して話していませんし、当方の使者として動いているとばかり思っていました。しかしディオニジオが私を出し抜き、ドミニコを伴い、マウリツイオとともに私をせきたてて恐怖にからせました。私はこうはしたくなかったのです。彼らとは離れて（実家のある）ステイニャーノにいたのですから。ディオニジオは船を出して仲間を集めにいきました。私は手紙をクラウディオ・クリスポに託しました。……するとクリスポは、私の敗北だろうと言いました。しかし私には信じられませんでした。ディオニジオがあんなことを喋って戦いの場に出るように私たちを、脅えさせたなんて。私は陰謀者名に私の名が挙げたがそれは違う



カラブリア地方
(陰謀時、1599年6-9月)

〔地図2〕

と判事ダヴィドに主張しました。私はこの一件を知らないが、知っている限りを、判事殿の部下がカタナーロにやってきたとき話すつもりだ、という手紙を書くつもりでした。デイオニジオはそういうことはすると言いました。もうその域を越えてしまっているとも。父(ジェロニモ・カンパネッラ)がこうした知らせを耳にしたとき、びっくりして泣き出して私を論しました。

ステイーロのマウリツイオからステイニャーノに逃げるしかなかった。サンタ・マリア・デ・ティティ修道院「ステイニャーノとわずかな距離」で食いつないだ。父は反乱分子として反抗に及ぶくらいなら死をカンパネッラに求めてきた。最後は海に逃がしてやるということで、ジョヴァン・アントニオ・メズルコの家に着くが、メズルコの裏切りによって三日後の九月六日、スペイン憲兵隊によってロチェツラで捕縛される。

カンパネッラは「以上が私が知っている陰謀の一部始終です」と言い、「誓って言いますが、判事ダヴィド殿も感動した私の説教の言葉が、多くの人たちの心を動かしたとは思いますが、意外性を述べることを忘

れてはいない。

時と機会がここで言わしめさせたこれら特別な事柄を私は話しました。……いま話した内容が私の知り記憶しているすべてです。

私こと、修道士トマーゼ・カンパネツラが書き、検事殿の前で署名いたしました。……

私儀、修道士トマーゼ・カンパネツラ

四、考察

1 預言(者)について

冒頭からカンパネツラは自分を預言者だと位置づけて供述してゆくが、その際、〈コリント書〉の一節を引用しているのに注目すべきであろう。これはキリスト教のひとつの伝統にしたがつているという印象を検事側に与えて優位に事を進めていこうという戦略、悪く言えば狡智が窺える。キリスト教徒であるのを逸脱していないと提示する、教会側に対する方便とみてもよいであろう。

フィオーレのヨアキムはもとより、百年前にはフィレンツェでサヴォナローラが預言者として熱弁をふるった。二人とも、その生涯の終え方はちがつてもキリスト教徒であった。カンパネツラはその延長線上に自分の理念的立場を意図的に築き上げたのだろう。

聖書の文言を引用することで、言わば、権威をカンパネツラは必要としたにちがいない。

というのも、彼は故郷に錦を飾って戻ってきたのではなかった。位階のいまだつかないうらぶれた平修道士の身のままであり、そうした自分が扱って立つべき後楯に聖書の文言はきわめて有効であったろう。

試訳した中に登場する、ステイリオーラはじめ預言者たちは、チプリアーノ以外は、カンパネッラがナポリ滞在中〔二五八九末―九二年初〕に、おそらくデッラ・ポルタ家で出会っていると推測される。『自然魔術』を著わした、デッラ・ポルタ家の次男、ジャンバッティスに影響されて若いカンパネッラは神の第二の書としての自然のオカルト的探求にいつそう好奇心を深めていった。

しかしデッラ・ポルタもステイリオーラも異端審問を受けているが、抑圧されはしなかった (Villari 1967: 101) 一五八六年、教皇シクストゥス五世〔在位一五八五―九〇年〕は占星術を否認する大勅令を出しているが、その真意には預言と社会的・政治的不満が合体して難事が勃発することへの懸念があったと思われる。もちろん占星術への信頼をキリスト教へと向けさせようという意図はあつてしかるべきである。しかし十三年後にカンパネッラの陰謀が発覚するのを考慮すると、教会は人々の宗教感情を甘く見すぎていたきらいがないでもない。

カンパネッラはこの教会の隙につけこむかたちで預言者として登場してきた。

預言で述べられていることは、洪水や大地震といった自然災害であつて、その中に埋め込まれるようにして変革が生じると書かれているのは〈供述書〉の試訳のとおりである。「福音書に則つて、シチリア島、カラブリアで大地震が、ローマとロンバルディアでは大洪水」が起こる、という条などでは、福音書まで持ち出されている。

また同時にナポリ王国の閣僚 (スペイン人) への不満も述べられている。これは〈供述書〉の他所を讀んでもわかるように、実際不満はあつたのであろう。カンパネッラ『スペイン帝政論』第十四章「スペイン帝国の豪族^{パローネ}について」に以下のような記述がある (Campanella 1620: 127-128)。

豪族たちは……ナポリにやってきて、宮廷に赴きます。そしてそこでたんまりと気前よくお金を使い、いつとき派手に振舞うのです。……ついにあり金全部を費い果たすと、貧しい故郷へと戻っていき、搾取できるものなら何でも搾取して金に換え、懐をあたためて、再度宮廷に出向いていくわけです。彼らはあたかも同じ環の中にいるように、いぜんとして愚行を繰り返しているのです。あまりにもひどい行なのでイタリア王国の領土よりも、南イタリアの領主たちの土地がずっと荒れ果てて無惨に見えてしまいます。豪族たちの怠慢のなせるわざなのですが。

この分析はおそらく正鵠を射たものであつたらう。

搾取される側の人々に不満がたまつていくのは明らかである。経済面での困窮は政治の貧困にあり、そこに異端者であるカンパネッラの教会から追い詰められた精神的窮迫感が重なり、預言の力で使徒となり、民衆を鼓舞するには絶好のチャンスであつた。民衆の中にもそれを受容れる素地があつた。

2 仲間・発覚について

陰謀を発覚へと導いたのは、旧友のディオニジオ・ポンツイオということになる。彼とはニカストロのアッスンツィアータ修道院時代からの友人である。彼は変革には好意的であつたが、仲間に加担してはいない。暴力事件を起こして懲戒になるのを恐れて心の平静を失つての失言だったのかもしれないが、カンパネッラにしてみれば、予期せぬところからもれたことゆえ衝撃は大きかつたであらう。

ディオニジオも収監されるが、看守と謀つて脱獄する。しかしコンスタンティノーブルで再度暴力事件を起こしてムスリムに殺されている。

こうした賛同者は、たとえ賛同者と言えどもあまり歎ばしい存在ではない。

マウリツイオという人物は殺人を犯してステイローを追放された男で、階級は貴族であった。陰謀の主要メンバーの一人である。またコンテスタタービリア家の人々も一言で表現すれば物騒な感じがする。他にも各地にカンパネツラは出向いて仲間を募るが、上は身分のあるものから山賊まがいの素性の知れぬ下層のものまで、身分、人品、教養その他諸々に均一性が欠落していたことが挙げられよう。これでは集団の一角が崩れれば、全体がもろくも瓦解していくのは一目瞭然である。陰謀の組織の強化に無関心だったカンパネツラは使徒的姿勢を最後まで保ったが、戦わずして逃げたという無様な印象はやはり残る。

カンパネツラの父（ジェロニモ）、末弟（ジョヴァン・ピエトロ）も加わっていて逮捕されている。最終段階にきてカンパネツラの警護役を務めた弟ファブリツイオは逮捕を免がれている。

3 目的

スペインからの独立―スペイン政府の介入しない国の創建。つまりスペインからの独立のための陰謀ということになるが、その範囲がナポリ王国すべでなのか、カラブリアだけなのかは〈供述書〉だけからは判断できない。しいて目的と云えば、カンパネツラの預言者の説法や自己顕示欲が当時の悲惨な政治状況にうまく見合い、彼はそれを試したし、また民衆に利用される格好にもなった。しかし、そうした変革の雰囲気やカンパネツラ自身が世紀末という時代風潮の中で醸成することに成功したが、計画・仲間などの陰謀の実質面で結果的には失敗したと言えよう。

五、おわりに

今回取り上げた〈供述書〉に署名したあと、カンパネッラはナポリに送還され、拷問を受けたあと二つの弁明書を書く。それにはより明確に彼の理念が記されている。カステルヴェテレの〈供述書〉は喩えるとすれば原石である。解読不能な箇所もある。まさに心情吐露であるが、カンパネッラの人間像の一端が浮かび上がってきていて、興味が尽きない。

引用文献

- Campanella, T. 1620 *Monarchia di Spagna*, per cura di Alessandro D'Ancona
Cunsolo, L. 1987 *La storia di Stilo e del regio demania*, Cangiemi Editore
Firpo, L. 1998 *I processi di Tommaso Campanella*, Salerno Editrice
Formichetti, G. 1999 *Tommaso Campanella — Eretrico e Mago alla Corte dei Papi*, Edizioni Piemme
Villari, R. 1967 *La rivolta antispagnola a Napoli Le origini (1585-1647)*, Editore Laterza